

# 花ちゃん、オー君、モンタ博士のわくわくドキドキ園立ててく3

国立市立国立第七小学校

平成27年10月1日 NO.53 (253)



花ちゃん 「モンタ博士！校庭のコスモスが咲き始めました。」

オー君 「このまえ、夕やけ空に赤トンボが飛んでいました。」

花ちゃん 「すっかりと秋本番になりましたね。学芸会ももうすぐです。」

モンタ博士「そのとおりだね。学芸会のところにはコスモスが満開になるだろうね。」

オー君 「ところで、いままで国立七小にはこんなにたくさんのコスモスがあったかな。」

花ちゃん 「花があると、心がいやされますね。」

モンタ博士「そうだろう。朝、学校に入った時にたくさんの花があれば気持ちいいよね。」

そのためにみんなで種をまいたんだ。もう忘れてしまったかな。」

オー君 「夏休みにプールに来た時には、たくさんのヒマワリが咲いていたね。」

モンタ博士「そこでモンタ博士はね、ヒマワリの花の数を数えたんだ。」

花ちゃん 「え！ヒマワリの花を数えだ？」

モンタ博士「そうだよ。夏休みの第一週目は150個くらい、第二週目は250個くらい、

そして、第三週目ころ、なんと300個以上花が咲いていたんだ。」

オー君 「ぼくは、体育館の西側にヒガンバナがたくさん咲いているのを見つけました。」

モンタ博士「気がついてくれたんだ。うれしいね。あのヒガンバナは、モンタ<sup>せい</sup>星<sup>も</sup>から持ってきたものなんだ。それからシャガも100株<sup>かぶ</sup>くらい<sup>はこ</sup>運<sup>う</sup>んで植<sup>う</sup>えたのさ。」

花ちゃん「いろいろなお花<sup>はな</sup>で国立七小<sup>くにたちななしょう</sup>が花<sup>はな</sup>いっぱいになることは、とても嬉しいですね。」

オー君「そのとおりだね・・・でも、ちょっと疑問<sup>ぎもん</sup>に思<sup>おも</sup>うことがあるんだけど。」

花ちゃん「どうしたの。急<sup>きゅう</sup>にまじめな顔<sup>かお</sup>して？」

オー君「ぼくはいつもまじめさ。ところでさ、コスモスやヒマワリは春<sup>はる</sup>に種<sup>たね</sup>をまいて、夏<sup>なつ</sup>や秋<sup>あき</sup>に花<sup>はな</sup>を咲<sup>さ</sup>かせるだろう。でも、ヒガンバナやシャガなどは、同じよう<sup>おな</sup>に種<sup>たね</sup>をまかないで育<sup>そだ</sup>てるのが不思議<sup>ふしぎ</sup>なんだ。」

花ちゃん「そういえばそうですね。菜<sup>な</sup>の花<sup>はな</sup>などはこれから種<sup>たね</sup>をまいたりするんでしょ。」

モンタ博士「ほほー。それはいいことに気づ<sup>き</sup>いたね。不思議<sup>ふしぎ</sup>に思<sup>おも</sup>うこと。なぜかなと考<sup>かんが</sup>えることは、科学<sup>かがく</sup>の大切<sup>たいせつ</sup>な『はじめの<sup>いっぽ</sup>一歩』だね。」

オー君「植<sup>しょくぶつ</sup>物<sup>ぶつ</sup>といっても、いろいろとあるんですね。」

モンタ博士「そうだね。ヒマワリ、コスモス、それからアサガオなどは、春<sup>はる</sup>に種<sup>たね</sup>をまいて、花<sup>はな</sup>が咲<sup>さ</sup>いて、その後<sup>あと</sup>はどうなるのかな。冬<sup>ふゆ</sup>はどうしているのかな。」

オー君「秋<sup>あき</sup>に種<sup>たね</sup>ができてから、その後<sup>あと</sup>は枯<sup>か</sup>れて種<sup>たね</sup>で冬<sup>ふゆ</sup>をこします。」

モンタ博士「そうだね。種<sup>たね</sup>をまいてから生<sup>せい</sup>長<sup>ちやう</sup>して花<sup>はな</sup>が咲<sup>さ</sup>き、枯<sup>か</sup>れるまでの期<sup>き</sup>間<sup>かん</sup>が1年<sup>いちねん</sup>間<sup>かん</sup>以<sup>い</sup>内<sup>ない</sup>の植<sup>しょくぶつ</sup>物<sup>ぶつ</sup>を1年<sup>ねん</sup>草<sup>そう</sup>というんだ。」

花ちゃん「つまり、ヒマワリ、コスモス、アサガオは1年<sup>ねん</sup>草<sup>そう</sup>というのですね。」

モンタ博士「それに対して、根<sup>ね</sup>や株<sup>かぶ</sup>があり数<sup>すう</sup>年<sup>ねん</sup>にわたり花<sup>はな</sup>が咲<sup>さ</sup>くのを多<sup>た</sup>年<sup>ねん</sup>草<sup>そう</sup>というんだ。」

オー君「つまり、ヒガンバナやシャガなどは多<sup>た</sup>年<sup>ねん</sup>草<sup>そう</sup>ということですね。」

モンタ博士「そのとおりだね。まあ、ヒガンバナやシャガは種<sup>たね</sup>をつくらないで株<sup>かぶ</sup>だけで増<sup>ふ</sup>えていたり、多<sup>た</sup>年<sup>ねん</sup>草<sup>そう</sup>は宿<sup>しゅつ</sup>根<sup>こん</sup>草<sup>そう</sup>といたり、多<sup>た</sup>年<sup>ねん</sup>草<sup>そう</sup>といっても2種<sup>しゅるい</sup>類<sup>い</sup>あって、根<sup>ね</sup>は生<sup>い</sup>きていても、冬<sup>ふゆ</sup>は地<sup>ち</sup>上<sup>じやう</sup>部<sup>ぶ</sup>が枯<sup>か</sup>れてしまうものと、そうでないものとにわかれるんだ。さらに、秋<sup>あき</sup>に種<sup>たね</sup>をまいて次<sup>つぎ</sup>の年<sup>とし</sup>の夏<sup>なつ</sup>には枯<sup>か</sup>れてしまうように2年<sup>ねん</sup>間<sup>かん</sup>にわたって生<sup>せい</sup>長<sup>ちやう</sup>するものを2年<sup>ねん</sup>草<sup>そう</sup>というばあいもあるんだよ。」

オー君「ふーん。いろいろとあるんですね。少しは分<sup>すこ</sup>か<sup>わ</sup>ったような気<sup>き</sup>がします。」

花ちゃん「これからは、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>でもいろいろと調<sup>しら</sup>べてみます。」